

第 2 回新潟地域看護研究会を開催しました

テーマ 保健師としての実践力をUPさせよう!

平成 30 年 9 月 1 日 (土) 場所: 新潟大学医学部保健学科

社会人学び直し WG 「高度実践看護師等育成事業」では、社会人の学び直しの機会を提供し、新潟県における高度実践看護師等の地域包括ケアを担う保健医療人材の育成と定着化を図るとともに、雇用の創出や拡大を目的に、高度実践看護師等の啓発普及、人材育成プログラムの検討・開発等を行っています。今回は、「事例検討」と「地域看護専門看護師（以下、地域看護 CNS）の実践」の講義を通し、保健師としての実践力の向上を目指すとともに、地域看護 CNS の活動の普及を目的に第 2 回新潟地域看護研究会を開催しました。

セミナー I : 地域看護 CNS からのコンサルテーションによる事例検討 10:30~12:30

「外国人大学生結核患者の療養支援」

事例提供者: 南魚沼地域振興局健康福祉環境部医薬予防課 主任 (保健師) 山田知佳

助言者: 上越市健康づくり推進課 保健師 小林奈緒子 (地域看護 CNS)

新潟県総務管理部人事課 主査 (保健師) 室岡真樹 (地域看護 CNS)

ファシリテーター: 新潟大学大学院保健学研究科 教授 小林恵子

今回は、日本に留学中に結核を発症した外国人留学生の A さんへの支援事例を素材に、文化の違いや言葉の壁がある中で、『当事者の視点や思いを尊重した保健師の支援のあり方』を主たるテーマとし事例検討を実施しました。

山田さんは、結核管理としての結核治療の完遂に向けた支援や適切な接触者健診の実施など医療・公衆衛生上の課題への対応はもちろんのこと、留学生として来日中に結核を発症してしまった A さんの日本での療養と学生生活を支援したいと考え、A さんの「希望や思い」に着目しそれを捉える努力をされていました。しかし、その中で文化的背景の違いや言葉の壁があり、A さんの発言の真意がとらえきれず本心がつかめていないという思いを感じるとともに、大学の学生センターからの情報で周囲の学生の中には接触者健診や L T B I 治療への不満を訴えている学生もいることを把握し、自分自身の関わりに葛藤を感じていました。



検討の中で、『日本と母国をつなぐ人材になりたい』という目標をもって留学してきた A さんにとって、今必要なことは『大学というコミュニティに“安心して”所属し、学業が支障なく継続できる』ことであると捉え、そのために必要な本人自身および周囲への支援策を出し合っていました。結核は感染性の疾患であることから周囲からの差別を受けやすく、A さんが安心して大学生生活を継続することの妨げとなる可能性があります。特に今回の事例では、A さんも周囲の学生の

多くも外国人であり、出身国（国の文化や宗教等）により対象者それぞれの持つ価値観や結核への認識も多様な中での対応という難しさがありました。そこで、支援策の検討にあたっては、保健師が従来行ってきた支援方法にとどまらず、『当事者のそれぞれの思いを理解し、当事者の考えや希望を尊重した支援』を考えることが重要であることを確認しました。そのための具体策として、保健所と学生センターとが連携しながら当事者の声を継続的に把握していく方法やAさんや周囲の学生と一緒に対応策を検討する方法などのアイデアを出し合いました。

検討を通して、異なる文化的背景を持つ対象への支援において、保健師は常に当事者の味方となり、当事者の思いを聴く・理解したいという姿勢を示し続けること、そして、当事者の考えや希望を尊重しながら当事者と共に対応策を考えていくことの重要性を確認しました。当事者の考えや思いを聴きながら一緒に考えていくことで、今までとは異なるアプローチ方法が見えてくる可能性について考えることができました。

最後に、CNS より対応策の適切性や優先順位の判断に活用できるツールとして、『倫理原則（自律尊重、善行、無害、正義（公平性）、誠実）』の枠組みについて情報提供があり、倫理原則に基づいた対応策を判断する視点が示され支援を検討する際の貴重な視点を学ぶこともできました。

○事例を提供して

事例検討を通して、改めて「本人のニーズを明確にすること」の重要性に気づくことができました。支援対象者が外国人であるため、言葉の壁や文化的背景の違いはありますが、その中でも工夫して対象者の考えや希望を確認した上で、今後の支援をしていきたいと考えています。（山田知佳）

セミナーⅡ： 地域看護 CNS の実践－エビデンスに基づく保健師活動－ 13：30～14：30

話題提供者：上越市健康づくり推進課 保健師 小林奈緒子（地域看護 CNS）



地域看護 CNS の先駆者としてご活躍され、さらには今年5年毎に行われる更新審査に合格し、さらに活躍の場を広げられている小林奈緒子さんから、地域看護 CNS を目指した理由と大学院での学び、CNS としての実践活動の実際、実践で大切にしていることなどをお話しいただきました。

小林さんは、日々「実践すること」に追われる中で、実践の基盤となる知識不足や自分の実践への迷いを感じ、自分の保健師活動の基盤をしっかりと作りたい思いで進学を決意されました。大学院ではエビデンスの高い実践を行うための

根拠と意図の重要性とそれを明確にするための様々な理論的枠組みを学ぶとともに、それらを用いて実践の意図と根拠を言語化するトレーニングをしたそうです。

CNS は「高度な実践」「調整」「倫理調整」「コンサルテーション」「教育」「研究」の6つの役割の遂行とその実践能力が求められます。今回の報告の中では「コンサルテーション」の実際として他機関から相談のあった対応困難（不適切な介護）事例が紹介され、家族システム理論を用い支援者とともに家族のおかれている状況を紐解いていく中で、支援者の家族の見方が「問題家族」から「支援調整が必要な家族」へと見方が転換していった様子や、家族内や家族と支援者間で起こっている



対立を『倫理的課題』として捉え、誰の、何の価値が具体的に対立しているのかを看護倫理の枠組みを活用して具体的に捉え、調整すべき課題を明確にしていくプロセスについて紹介がありました。また実践活動の中での「研究」の重要性も強調され、研究の成果が実践の根拠となることや、研究を通して実践が評価できることで実践者のモチベーションの向上にもつながるとい話がありました。意図や根拠を不明確なままだとケアのひずみや看護職自身のモヤモヤにつながります。小林さんが CNS と

して重視されていることは一貫して「意図と根拠の明確化」と「実践の言語化」であり、それが保健師の実践のエビデンスとなると強調されていました。

報告後のディスカッションでは、参加者から自らの実践の意図と根拠の明確化に活用できるツールに関する質問や地域包括ケアが重視される中で地域と医療機関との連携強化に向けた CNS の役割や実践に関する質問に対して、CNS から情報提供があるなど、参加者が CNS の思考と実践を学ぶ機会となるとともに、自らの実践にも活かせるヒントを得た実践報告となりました。

○実践報告をして

活動の意図や根拠を明確にする過程においては、まず課題に気づくことが重要と考えます。一人の保健師だけではなく、多くの保健師と関係者が互いに意見を出し合う中で課題に気づき、その解決に向けてお互いが力を出し合うことでよりよい保健活動につながるといいます。(小林奈緒子)

参加者・アンケート結果

1. 参加者 セミナー I (事例検討) : 21 名 セミナー II (CNS の実践報告) : 21 名

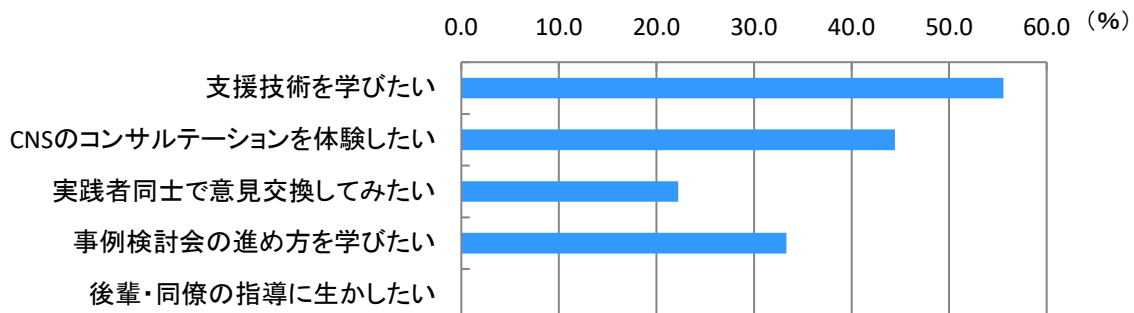
参加者の内訳 (人数)

| | 実践者 | 学部学生 | 新潟大学教員 |
|---------|-----|------|--------|
| セミナー I | 12 | 4 | 5 |
| セミナー II | 9 | 6 | 5 |

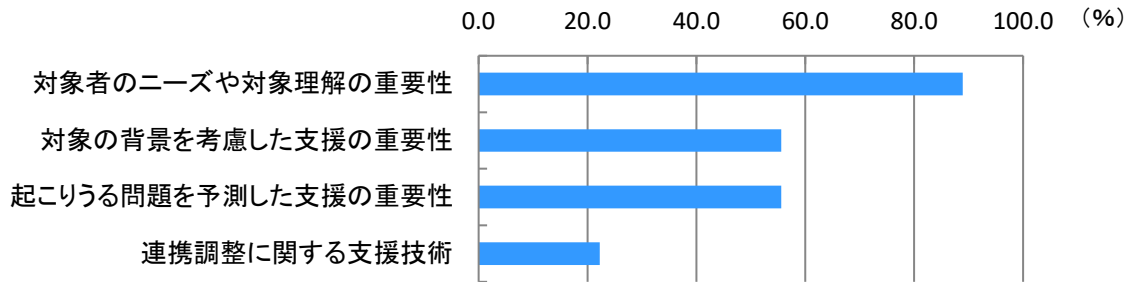
2. アンケート結果 (実践者のみ・一部抜粋)

1) 事例検討 (回答者数 9)

①参加動機 (複数回答)



②事例検討を通しての気づきや学び（複数回答）



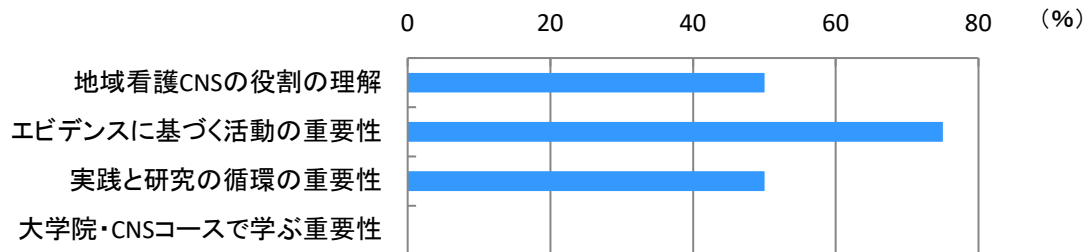
事例検討会に参加した皆さん全員がまた参加したいと回答していました。

2) CNS の実践報告（回答者数 8）

①参加動機（複数回答）

「CNS の活動に関心がある」6 人、「大学院教育に関心がある」2 人でした。

②CNS の実践報告を通しての気づきや学び（複数回答）



全体をとおしての学び・感想（抜粋）

○セミナーⅠ：事例検討会

- ・感染症の患者支援では疫学的な対応ばかりに目が行きがちであるが、患者の生活支援の視点で関わる重要性を学んだ。
- ・文化的背景の異なる外国人患者の支援における実践知が得られた。
- ・倫理調整の枠組みを使い表にまとめてみることで、必要な情報が整理でき、分かりやすかった。
- ・業務から離れて純粋に事例検討できるのは貴重な体験だと感じた。現場でも活かしていきたい。

○セミナーⅡ：CNS の実践報告

- ・CNS の実践が聞けて良かった。根拠に基づく実践ができると、もっと自信をもって現場で仕事ができるのではないかと思い、学び続けたいと感じた。
- ・CNS の活動を学ぶ機会となりよかった。

第2回新潟地域看護研究会を終えて

今回の事例では、保健所の“組織”としての使命を果たしつつ、保健師として支援対象者の療養と今後の生活どう支援するかという少し異なる視点を持ちながら、保健師の役割を考えることができたと思います。感染症など、迅速、タイムリーに対応する必要のあるとき、“組織”としての使命を果たすことがまずは優先になりがちです。しかし、支援対象者のニーズと今後の生活を意識したとき、同じ感染症等でも個々で違う、その人に寄り添った支援を考えることができるのではないのでしょうか。検討をとおして、ひとつの事例からさまざまな学びができます。ぜひ多くの方に今回のような機会を活用していただけるとよいのではないかと考えています。

地域看護 CNS 室岡 真樹

事例検討では、対象者個人のより良い生活と、対象者を取り巻く周囲との連携と支援という、まさに個と集団の課題を考え支援する保健師の力が求められる事例でした。対象者と関係する人々への支援は切り離されるものではありませんが、参加者の皆さんが「自分なら、どう事例に関わっていくか」という検討を通して、個と集団への支援を整理し考えることができ、とてもよいディスカッションが行われていたと思います。対象者は「生活者」として様々な立場を持っており、病者としてのみではなく多面的な捉えることが重要です。事例検討は、参加者のディスカッションによって様々な見方やアプローチがあることに気づくことで、よりよいケアにつながり、また自身の力となっていくものと思います。多くの現場でこのような取組が行えるとよいと思いました。

地域看護 CNS 小林奈緒子

第2回新潟地域看護研究会に多くの皆様からご参加いただき、ありがとうございました。

今回の事例検討では、保健師として結核患者への支援を行っていく際に、医療・公衆衛生上必要な結核管理はもちろんのこと、対象者を『生活者』として捉え、対象者のQOLを重視した支援を行っていくことの重要性を再認識しました。また保健師の支援対象の中にも外国人が増加している中で、異文化の理解と当事者の価値観を尊重した支援を考えていくことの重要性を学びました。

また、CNSの実践報告ではこれぞCNSというお話をお聞きすることができ、エビデンスに基づく保健師活動の実践のためには、『意図と根拠を言語化する』こと、その基盤となる理論や知識を学び続けることの重要性を改めて感じました。

今回、事例を素材として提供していただいた山田知佳さん、地域看護CNSの思考と実践を具体的にお話くださった小林奈緒子さん、室岡真樹さんに感謝を申し上げます。

私たちは、今後もこのような研究会をとおして、地域看護CNSの活動や大学院での学び直しの機会を発信していくとともに、保健師の皆様に学び直しの機会を提供していきたいと考えています。

小林恵子・齋藤智子・成田太一・堀田かおり・八尾坂志保

次は、平成31年2月2日（土）に新潟地域看護研究会の開催を予定しています。
是非ご参加ください。

主催：新潟大学大学院保健学研究科
（担当者 小林 齋藤 成田 堀田 八尾坂）
共催：新潟県 公益社団法人新潟県看護協会
全国保健師長会新潟県支部 新潟県職員保健師会
後援：新潟市 全国保健師長会新潟市支部

新潟地域看護研究会
〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746
新潟大学大学院保健学研究科地域看護学
TEL: 025-227-0944（担当：成田）
Mail: chiiki@clg.niigata-u.ac.jp